

## 「ソラニン」



2010（平成22）年3月4日鑑賞<アスミック・エース社内DVD試写>

監督：三木孝浩

原作：浅野いにお

井上芽衣子（OL2年生）／宮崎あおい

種田成男（フリーター、芽衣子の恋人、ロッチのギター・ボーカル担当）／高良健吾

ビリー（薬屋の跡継ぎ息子、ロッチのドラム担当）／桐谷健太

加藤賢一（大学二留中、ロッチのベース担当）／近藤洋一（サンボマスター）

小谷アイ（芽衣子の親友、加藤の恋人）／伊藤歩

冴木隆太郎（レコード会社の新人開発担当者）／ARATA

大橋（芽衣子に恋心を寄せる年下の男）／永山絢斗

鮎川律子（バンドサークルの新入生）／岩田さゆり

芽衣子の母／美保純

種田の父／財津和夫

2010年・日本映画・126分

配給／アスミック・エース

### <辞めるのは簡単だが・・・>

本作の主人公は都内の会社に勤めるOL2年目の井上芽衣子（宮崎あおい）と、バイトをしながらバンドの夢をあきらめきれない芽衣子の恋人種田成男（高良健吾）。2人は多摩川沿いの小さなアパートに住んでいるが、夜中のバイトに出かけている種田と朝から出勤する芽衣子とはすれ違いの日々が多いようだ。そして今日は、芽衣子が仕事先で上司から大目玉。就職が決まった時は芽衣子も良かったと思っていたのだろうが、露骨に「お前の代わりはいくらでもいるぞ」と言われて落ち込んでいる芽衣子は、思わず種田に「あたし、会社辞めちゃうかな？」とつぶやいたところ、意外にも種田からは「辞めちゃいなよ。芽衣子さんが本当にそうしたいなら。」との優しい(?)返事が……。しかも、種田からは「行きつく先が世界の果ての果てだとしても、芽衣子と俺はずっと一緒なんだから」との力強い(?)一言が。これにて芽衣子は2年間勤めた会社とジ・エンドとなったのだが、さて2人の生活はこれからどうなるの？

### <これが今ドキの若者の生き方？>

映画前半はそんな芽衣子の大変身ぶりと、ああは言ってはみたものの、芽衣子が仕事を辞めたことによって現実をどう生きるのかに悩む種田と芽衣子との間に生じる気持のすれ違いを細かく描写していく。芽衣子の相談に乗るのは、親友のアイ（伊藤歩）。そして、種田のバンド仲間であるドラム担当のビリー（桐谷健太）と加藤（近藤洋一）だが、厳しい現実の中で懸命に生きている61歳の弁護士の私としては、これが今ドキの若者の生き方？と思うとイライラするばかり。

思わず、居酒屋で飲んでジャレる暇があるのなら、そしてわかったような人生論議をするのなら、その前に毎日、毎時間一生懸命働けよ、と叫びたくなってしまったが……。

### <完全に女性上位の、あんな呼び方が今ドキの流行？>

最近は大学生の幼稚化が顕著だが、とりわけそれが著しいのが男。小学4、5年生頃は女の子の方が成長が早いから男より女の子の方がませているのが普通だが、中学生にもなるとやはり髭が生えはじめた男は男として自立し堂々としてくるもの？ところが、そんな話は半世紀前のことらしく、今や大学生でも同級生同士なら完全に女性上位？

種田と芽衣子は大学時代に軽音サークルで知り合ったらしいから、多分同級生？また、アイは加藤と付き合っているらしい。ここで私が注目したのが、こんな恋人同士の名前の呼び方だ。本作を観ていると、女が男を呼ぶ時は種田や加藤と苗字の呼び捨て。逆に、男が女を呼ぶ時は芽衣子さんやアイさんだから、こりゃ一体どうなってるの？昔は、女が男を呼ぶ時は「〇〇さん」とさん付けで呼び、逆に男が女を呼ぶ時は「△△子」と名前の呼び捨てだったのでは？私は別に男尊女卑論者ではないが、種田はもちろんビリーや加藤のあまりにも自信のなさそうな姿をみていると、そのあまりの幼稚さにビックリ。

これでは日本が経済競争で中国に負けるのは当然だし、2010年2月28日に閉幕したバンクーバーの冬季オリンピックでも、メダル数で圧倒的に韓国にやられたのは当たり前？

### <たったこれだけの練習でステージに？>

タイトルの『ソラニン』とは「ジャガイモの芽などに含まれる毒の一種」とのことだが、なぜ本作はそんなタイトルに？本作は、ある交通事故によってあっけなく死んでしまった種田がつくった『ソラニン』という曲を、芽衣子が種田の代わりにステージに立って歌うというだけの単純な(?)ストーリー。前半1時間は延々と種田と芽衣子との恋人関係に関する人生論が展開され、宮崎あおいのギター風景が登場するのはラスト30分になってから。そして、バンド名「ロッチ」のギター兼ヴォーカルを種田から引き継いだ芽衣子がステージ上で『ソラニン』を見事に歌いあげるといのが本作のクライマックス。

私は昨年4月から中国語の勉強を始め、今年3月末で丸1年になるが、一生懸命やっているつもりでも実はまだまだ。しかして、種田が死亡した後さまざまモヤモヤをやっと振り切った芽衣子が種田のギターを手にしたのはいいが、わずか数カ月の練習でバンドデビューできるの？確かに芽衣子は、種田がつくった『ソラニン』をギターで弾きかつ歌うと決意した時からかなりハードな練習をこなしていたようだが、ギターって、またバンドってそんなに簡単なの？

### <こんな安易な企画では、再び邦画はダメに？>

2009年は映画の興行収入が総額2060億3500万円になったばかりか、邦高洋低の傾向が強まり、邦画56.9%、洋画43.1%の比率になった。これには『劔岳 点の記』（08年）や『沈まぬ太陽』（09年）など良質な邦画が公開されたことや、ハリウッド映画の質の低下という両面がある。なお、邦画の興行収入が伸びたといっても、テレビ局とのタイアップで製作された映画が多く、『ROOKIES -卒業-』（09年）や『ごくせん THE MOVIE』（09年）ばかりが大ヒットというのは、私には心配のタネ。

今は不安な時代、そして若者が生きるのにしんどい時代。そんな時代状況の若者たちに生きる道を指し示す原作や映画がたくさん生まれているのは当然だが、私の目にはそれらはあまりにも甘いものに思えてならない。本作も、私が仕入れた事前情報では浅野いにおの原作に沿った、いかにも甘ちゃん映画というイメージだったから、観に行くかどうか大いに迷ったのが正直なところ。しかし、私の大好きな宮崎あおいの主演、しかもはじめてギターとヴォーカルに挑戦ということなので観に行ったが、結果的にはつきり言って時間のムダ。こんな安易な企画では、再び邦画はダメになってしまうのでは？

2010（平

成22）年3月5日記